
人間には心はあるのか

浅井 健二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間には心はあるのか

【Nコード】

N2216N

【作者名】

浅井 健二

【あらすじ】

雨宿りをしているビルの軒先で、見知らぬ女から突然聞かれた「あなたはロボットじゃないですか？」

男は自分が人間であることを証明しようとするが・・・

哲学的ホラー

夜の7時。会社を抜け出してコンビニで夜食を買った。今日中に契約書を仕上げなくてはいけない。サンドイッチ片手に頑張つて、帰社時刻はおよそ夜の10時だろう。何となく周りに流されてエリートサラリーマンになってみたが、仕事もプライベートもストレスばかりで面白くない。なんでこうなっちまったんだか……。いつの頃からか、社会に対して、人に対して違和感を感じるようになっていた。日常の中で、まるで違う星に迷い込んだ異星人のように感じることがある。

病んでるな・・・俺。

もう一度人生をやり直せるとしたらどんな職業につこうかなんて、現実逃避的空想に遊びながらコンビニ袋をブラブラさせて歩いてみると、突然バケツをひっくり返したような豪雨が襲ってきた。やばい。このままでは一分もたたないうちに全身ずぶ濡れだ。俺は慌てて一番近い雑居ビルの軒先に逃げ込んだ。

昭和パレスビルヂング

ビルはおそらく築30年は経過しているだろう。エレベーターもない。5階建ての薄汚い建物だ。蛍光灯もたまにチカチカと点滅し、メンテナンスの悪さを物語っている。

30秒後、女が一人飛び込んできた。俺より少し長く雨に打たれたんだらう。髪も服も水を吸って重たそうだった。女はハンカチで水滴を拭いながら、俺に気が付き会釈をしてくる。美人だ。俺も反射的にぺこりと頭を下げて、よからぬ想像をする。もしも会話が弾

めば、この後一杯どうですか？なんて展開もあり得る。そうしたらホテルに行つて・・・そんな都合のいいことを考えている俺を女はチラチラと見てくる。どうしたんだろう？まさか俺のいやらしい心を読んでいるわけじゃあないだろう。もしかして、俺に気があるんだろうか？それとも何かの勧誘か？それとも見おぼえがないけれど知りあいだろうか？

「何ですか？」

女があからさまに俺を見てくるので、気になって俺から声をかけた。女は少しびびくりしてから言った。

「あのう・・・」

「はい・・・」

「あなたは・・・ロボットじゃないですか？」

ロボット・・・？意味不明な問いかけに俺の心は警戒モードに入った。初対面の人間に対して意味不明なことを言い出ということ、ちょっと頭がおかしいのだろうか？そうだとすればあまり関わり合いにならないほうが賢明だ。

「人間です」

無視してもよかったが拒絶のニュアンスを少し込めて短い言葉で返すことにした。しかし、女はひるんだ様子もなく「いいえ。私にはわかります。あなたはロボットです」と言ってきた。やっぱり頭がおかしそうだ。それとも何らかのドッキリ企画か、新手の勧誘方法なのか。俺は女の真意を探るべくもう少し相手をすることにした。

「何故。僕がロボットだって言うんですか？」

「だって、あなたには心が見当たらないから。姿形が人間と一緒に心がないければロボットです」

確かに、感情の起伏があまりないと言われるが、心がないとまで言われる覚えはない。少しイラついてきた。

「心はありますよ。人間ですから」

「じゃあ、それを証明できるかしら・・・」

この時点で無視をすればいいのだが、俺は少しムキになってきた。女を論破してやりたい。そう思って携帯電話を取り出して、写真フォルダを表示した。

「これを見てください。」

「はい。これが何か？」

携帯ディスプレイに表示した写真は美しい空のショットだった。

「今朝、空を見たらあまりに綺麗だったんで思わず写真に撮りました。ロボットが景色を見て感動することもないでしょう」

「確かにロボットは感動しないですね」

「わかりましたか？僕はちゃんと心がある人間です」

「でも、それだけじゃ証明にはならないです。だって心があるフリをしているだけかも知れないから」

「フリ？」

「ええ。フリです。ロボットが人間のフリをするために、空の美しさに感動したフリをする。そして、ロボットじゃないかと疑われた時のために、携帯電話に写真をおさめておく。簡単なプログラムでそのくらいの行動は可能です」

「バカバカしい。へ理屈だ。何でわざわざそんなことをしないといけないんですか」

「それは、あなたがロボットじゃないと周りに思い込ませるためでしょう。今の行動でますますあなたがロボットだという疑いが強まりました」

「じゃあ、もういいです」

「何がいいんですか？」

「ロボットということでもいいので、もう話しかけないでください」
ちよつとの会話だけど俺は女の相手をするのに疲れてきていた。頭がおかしい女とどれだけ話したところでこのまま平行線だ。

「本当にいいんですね。ロボットで」

俺は返事をしなかった。そうすると女はゴソゴソとバッグに手を突っ込んで、こっちを見て言った。

「よかった。ロボットで」

そして、にたりとほほ笑む。その手には刃渡り10センチほどのナイフが握られていた。そして、ひゅっという風切り音とともに。俺の頬を何の迷いもなく切り裂いた。止まる時間。女はにたにたと俺を見る。その瞳には明らかな狂気がある。傷を手の平で押さえたら鮮血に染まった。血だ。

「な、何を・・・？」俺の問いが終わらないうちに女は言った。

「あなたがロボットなら、私はあなたを破壊します。人間なら殺すことはできないので、あなたがロボットで本当によかった。心おきなく破壊できるわ」

「ちょ、ちよつと待て。待ってくれ。破壊？何だ？何を考えてるんだ？こんなことをしていいと思ってるのか？」

「いいの。あなたはロボットだから。私はロボットを破壊する」

「待て。俺はロボットじゃない」

「だってさつきロボットって言ったじゃない」

「さつきはさつきだ。ロボットじゃない。人間だ。この通り。見る。これを」俺は血に染まった手の平を女に突き出して見せた。

「この通り、切れば血が出る。人間だ」

「確かに、血は出ている。でも、さつきと一緒に。そんなの人間だという証明にならないのよ。切れば血が出る構造のロボットなのかも知れない。脳味噌の代わりにCPUが動いているのかもしれないし、心臓じゃなくてモーターが動いているのかも知れない。あなたがロボットじゃないと証明できるのは心があることを証明できた時だけよ。もし、本当に人間だというのなら早く心があることを証明してみせなさい」

「ちよつと待ってくれ。何でだ？」

「何でって何が？」

「何で俺をロボットと言って破壊しようとする。何で人間だったら殺さずにロボットだったら破壊する？」

「そんなことあなたに説明する必要はないわ。心があることが証明できないならこうするだけ」そう言っただけで今度は額を真横に切り裂いてきた。

「ぎゃあ」

「あらロボットのくせにいつちよ前に悲鳴はあげるのね。なかなか人間らしい悲鳴よ。まあ、それもプログラムなんだろうけど。前髪も切れて揃っちゃったわね。ふふふ。バカみたいな髪型。このままちよつとずつ切り刻んであげようかしら」

女はそう言っただけで、血のついたナイフをぺろりと舐めた。

「も、もういいだろう・・・勘弁してくれ。俺が何をしたらって言うんだ？」

「あら。あなた、ズボンが少し濡れてるじゃない。怖くておしっこ漏らしちゃったの？いいわねえ。それもなかなか人間っぽいわよ。でも、やっぱり本当に恐怖心を感じているのかプログラムでそうやってるかはわからないから、駄目ね。じゃあ、そろそろ破壊することにするわね」

「ちよつと待ってくれ。理由を、理由を教えてください。誰かと間違っていないか？本当にこんなことをされる覚えはないんだ」

「あら、ロボットのくせに理由を知りたがるの？どうしようかなあ？教えてあげてもいいけど、教えてもあたしには何のメリットもないのよね。そうねえ。じゃあ、おしっこするところを見せてくれたらいいわ」

「な？おしっこ？」

「そう。おしっこ。それもただするんじゃないからズボンとパンツと一緒に脱いで、うんこ座りをしておしっこするところを見せて」

「バカな。そんなことが出来るわけないだろう」

そう言っただけで女は急に眼を釣り上げて、ものすごい形相で叫び出した。

「バカだと。このやろう。テメエが理由が知りたいっていうからあ

たしが条件を出してやってるんだろ。条件を出させといて飲まないとはどういっつもりだ」そう言って明らかに訓練されたローキックを俺の太ももに入れてくる。ズムっという音とともに、ナイフとは違う鈍い痛みが太ももに広がる。

「うっうっ・・・」思わず目頭から涙が零れ落ちた。なんて理不尽な女だ。

「あら。泣いちゃったの？ごめんなさい。でも、これでわかったでしょう。あなたには選択肢はないの。早くしろよこのやろう!!」情けないが俺はもう抵抗する気力も失くしてしまった。女に言われるままズボンとパンツを一緒に下ろす。

「そう、完全に脱いでね。あ、靴と靴下はそのまま。履いたままでそうよ。そうしてうんこ座りをして」

俺は、下半身裸になり、靴と靴下だけ履いたまましゃがみこんだ。

ちよろちよろちよろ・・・

ペニスから勢いのない小便が垂れ落ち、床に敷き詰められた古いタイルの網目に沿って流れて行った。うっうっ・・・俺は屈辱で泣いていた。それを見て女はにやにやと笑っている。完全にイカれている。

「なあ、一体俺が何をしたって言うんだ？教えてくれ」

「そこまでして知りたいのね。いいわ。教えてあげるから『このシヨン便漏らしに、教えてください。女王様』とお願いして」

「この・・・シヨン便漏らしに・・・、教えてください。女王様・・・」

「あははは。本当に言うんだ。プライドないのね。いいわ。教えてあげる。これはね。復讐」

「復讐？」復讐という言葉にさっきまでとは違う速度で俺の心臓が

「死ね？今、私、死ねって言った？死ねってどういうこと？ロボットだから破壊でしょう」

そう言っただけ再度ナイフを振り上げたがやっぱり振り下ろすことはできずに固まっている。まだぶつぶつと呟いている。

「心がないのがロボットだけど、心の存在は原則誰にも証明できない。私には確かに心があるけど、あの子の心を確かめたことはない。じゃあ、あの子もしかしてロボットだったの？というよりも、私が人間と生きていたのはもしかして全部ロボットだったの？私がこの男を破壊できれば私の中ではこの男はロボットということになるけど、そうすると私にとって人間は全部ロボットっていうことになるんじゃないの？じゃあ、この復讐に何の意味があるの？誰が浮かばれるの？あなた。聞いてる？答えて・・・」

女は一人で自問自答し、わけがわからなくなってしまうたように最終的に俺に答えを求めてきた。さっきまでの狂気や殺気が嘘のように抜けてしまっている。そこにあるのは悲しみだけのように見えた。

「答えはもう出ているんじゃないのか・・・？」

俺は恐る恐る言った。女の目は力を失っている。

「お前は人間を無理やりロボットと思いこもうとして失敗した。お前に人は殺せない。さあ、ナイフを渡すんだ」

そう言っただけ、女は放心したように俺にナイフを手渡してきた。その瞳には涙が一筋流れている。

ナイフを握りしめた俺は思わずにやりと笑ってしまった。

「俺の中でも答えが出たよ」力強く言うことができた。何故ならナイフはもう俺の手元にあるのだから。俺の言葉に対して、女は顔を上げて俺の目を覗きこんだ。そして、俺はナイフの柄を握りしめて、その心臓に水平にねじ込んでやった。ナイフを抜くとぴゅうつと鮮血がほとばしる。

「俺の感じてた違和感の正体。社会なんて存在しなかったんだ。俺が今まで人間だと思いこまれていたのはみんなロボットだったんだな。これですっきりした。確かに、ロボットだったら破壊してもいいよな。おかげで目が覚めた。これからは、迷わずに破壊したくなつた時に、ロボットを破壊することにするよ」

そうして、初めて破壊したロボットを床に転がした。少し心が痛む気がする。仕方がないな。俺だけがこの世で唯一の人間なのだから。この心の痛みは人間の証なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2216n/>

人間には心はあるのか

2010年10月17日03時09分発行